

平成 29 年度 公開授業研究会研究協議会「対談」記録

(平成 29 年 12 月 1 日)

講師：甲南女子大学教授 村川雅弘先生
東京都市大学教授 佐藤真久先生



対談テーマ「持続可能な安全防災教育とは」

対談内容

昆

それでは、対談を始めたいと思います。今回の対談は甲南女子大学教授の村川雅弘先生と東京都市大学教授の佐藤真久先生のお二人をお願いしています。校長の私(昆)と研究主任の國分は、お二人が何か、本校の取り組みの事で聞きたいことがある場合は答えてほしいということで隣に座らせていただいております。今回の対談はストーリーが全くないので、どこで指名されるかドキドキしています。

お二人の先生には大きく次のことを話題にさせていただきたいとお願いしています。

佐藤先生には、ESDの大切なポイントを安全防災教育と絡めてお話しいたきたいということ、村川先生にはESDの観点を踏まえながらこれから目指す資質・能力と新しい学力観に沿って、本校の安全防災教育をどのようにしていけばよいか、ということをお話ししていただきたいと思います。

お二人にはそれぞれ交互にお話ししていただくのですが、時々お互いに質問し合ったり、私たちに質問してくださるということですので、話がどこまで進むのか見当がつかないのですが、事前の打ち合わせはやめようとお二人で決めたので、みなさん、どうぞお楽しみにしてください。

それでは、初めに、佐藤先生にESDの大切なポイントについてお話しいたきます。

佐藤先生

では、第一バッターとして、私のほうからESDの大事なポイントという中で話をさせて頂ければと思います。横浜市の教員の方々は、このパンフレットをお持ちかなと思います。前回の北綱島小での研修会の時でも使わせて頂きましたが、少し論点の整理です。一点目は、ESD、率直に言えば持続不可能性に対する気付きであると、防災という言葉、災いを防ぐという言葉で言うならば、もしかしたら持続不可能性を防ぐということかもしれないですね。そう考えると、防災という捉え方そのものも、大きな可能性を持っているということが分かるかなと思います。これから、持続不可能なものに対してどうやって防いでいくのか、そういう中でESDと防災を掛けるということ、それだけ物凄い力があると

ということが分かるかなあとと思います。環境、社会、経済、色んなものの持続可能性を考えながら、我々自身の教育学習の新たな方向付けとの考え方、新しいものをやるというものではなくて、やはり今までの実践そのものの方向付けであるというのを、考えてみて頂ければなあと思います。教師が変わることが、児童生徒が変わり社会が変わる。教師が変わることが、学校が変わり社会が変わる。このESDの中でよく言われる言葉として、「変容」という言葉があります。先ほどの主事の方、校長先生からの話にも「変わる」という言葉が何度か出ていますが、「変わる」ということが、決して子どもたちに焦点が置かれているものではないということです。社会を変えなきゃいけない、その為に子どもを変えなきゃいけないと思いがちですが、我々もそれで変わっていくという「変わりの連関」というのが、ESDの中にあるのかなと。そういう中で、この持続可能な未来を考えたときに、我々はここで教育実践をやっているわけです。しかし、ESDのアプローチ様々なものがあると言われています。色んなアクティブ・ラーニングを踏まえたような学習的なアプローチ、カリキュラムの中での編成、そしてそれを連関させていけるようなカリキュラムの編成と実施の視点、「横浜の時間」といったような地域の課題と連動しながらやっていくようなアプローチ、そして学校運営そのものも持続可能性を考える上では重要なものなのかなと。今まで私も国内外ESDの取り組みを色々見てきましたけれども、学校の中でどうしてもカリキュラムというのに焦点が置きがちです。しかしながら、この北綱島、それを超えて、学習活動、そして地域課題、学校運営、色んなものが繋がっているということも、皆さん実感として分かるかなと。一つのアプローチだけではない、色んなアプローチを使いながら、ESDというものに目をやっていくと。横浜市教育委員会としても、今言われているそのカリキュラムのデザイン、マネジメントの話と、学校運営と繋げていこうという新たなアプローチをやっています。ただカリキュラムを変えるだけ、ただ学校運営をやるというよりも、それを連動させることによって、学校全体としてのアプローチが出てくるのかなと。「横浜の時間」を充実させながら、テーマに沿った単元、教材作り、資質・能力の話も当然あるかなと思います。年間授業計画、そして学校や地域と共に作る未来図、レガシーをつくっていく。先ほどの特殊学校の所でも議論になりましたけれども、先生たちが異動したとしても、地域の人たちがそのレガシーを持つことによって、学校もその中で生かされるんだという話がありました。全てのものを学校だけで捉えるのではなく、地域と連動することによって、その遺産、文化というのを作っていくと。そういうようなこと、そして、やることによって結果的に負担軽減に繋げていく、これはもう非常に横浜、今真剣に議論している最中ですが、やることによって皆が楽しく、そしてやるべきことを全部繋げていくと、そういうようなことにもなるだろうということで、カリキュラムデザインと学校運営を繋げていくというのが、このESDの肝なのかなと思うわけです。そういう状況の中で、横浜のESD、4つのレンズがあるというのは、以前話をさせて頂きました。北綱島でも注目されている「繋げる」という側面、ここで言うならば総合的なレンズ、何を繋げるか、それは皆が一緒に考えてみて下さい。人と人を繋げ、そして教材と教材を

繋げ、課題と課題を繋げていく、地域と学校を繋げていく。色んな「繋げる」というキーワードが北綱島の取り組みにいっぱいあったかなと思います。それだけではなくて、この3つの視点を見ていきましょう。

1つは、地域で世界で。この北綱島の場合は、まさにこの「横浜の時間」の中でも地域との連携をやっているわけです。それが、地域に繋がるだけではなく、世界を繋げる。そんな力もあるのかなと、それについては、後ほど先生のほうにも色々ご意見を頂ければなあと思っていますけど、村川先生とここら辺盛り上げていきたいなあと思っています。

あとは「見直す」ですよ。防災を防災として見るのではなくて、今回も防災を環境と掛けました、社会と掛けました、経済と掛けました。そもそも防災というのは、持続不可能性に対する問いですから、ESD そのものなのです。防災という言葉そのものの概念を広げることによって、人と人との繋がり、そして清水先生が先ほどおっしゃっていった「防災というのは地域の学びなんだ」という、我々が防災だけのものではなく、広いものと見直すことによって、今やっている実践というのが物凄いポテンシャルが高いことに気づくはずかなと思います。

そして4つ目のレンズとしての「変わる」というレンズです。変容的レンズという言葉になりますが、先ほど少し話をしました。社会を変えたい、子どもを変えたいという気持ちだけではなく、そこには我々が「変わる」ということがあります。教員が変わることによって生徒が変わる。教員が変わることによって地域も変わる。我々自身の問いでもESDってというのはあるわけですね。決して学校も、授業の中でESDをやるという文脈から、学校を超えた中でESDを皆でやっていくという、そういう発想に変えていくと、非常に気も楽になりますし、その中で色んなものが繋がってくるのかなと思います。全てを気負わず、そして自身が変わる勇気を持って、この4つのレンズを生かして頂ければなあと思います。繋げるといってもですね、色んな繋がりがあるわけです。教科と総合、身近と世界、教室と職員室、授業と生活、能力と態度。ここに空間があるわけですけど、何を繋げるかというのは、よく分からないのです。けれども、分断されているこの世の中で、持続不可能な現実がある中で、何を繋げるかが非常に重要な側面を持っていることが分かるかなと思います。個々で分かれたものを繋ぎ合わせることによって、それを教育課題、学習課題、そして身の回りの課題とも繋ぎ合わせる、何かそのようなきっかけとしてESDを使って頂ければ、ESDというのはもしかしたら学校の活性化に繋がり、もしかしたら総合学習のより進展型になっていくのかなと思うわけです。実際は、例えば文科省がやっているようなこのESDの視点ですよ。構成概念と資質能力態度、留意事項なんてありました。多様性、総合性、有限性、公平性、連携性、責任性。有限性なんて、なかなか今までの授業の中で教えられていなかったようなものも、防災という観点の中で、5年生の実践にも入っているわけです。そして資質・能力の話も色んな所で議論されていました。またここまで、能力と態度の繋がり。頭で分かっていたとしても、行動にできない。能力と態度をただ育てるだけではなく、その連関をどう繋げていくのか。そう考えると、「繋げる」とい

う言葉、昆先生が何度も紹介されていますけど、今までのところにこの種というのがあることが分かるかなと思います。カリキュラムの文脈で言えば、年間授業計画の中での関連付け、これもやっているという話も伺っております。どんな教科を1年の中でどういう風にデザインをしていくのか、それを改善していくのか、これについても、後ほど村川先生にご指摘頂ければなと思います。総合も今までクロスカリキュラムまでやってきました。この学校もですね、防災という切り口の中で探究型のものになってきているという印象を、私も非常に強く感じております。そして、なんとこれをやることによって、地域の人たちの変容もみられている。今日の特別支援学級の取り組みの中で、そのボランティアの方々の変容ぶりというのを私見することができました。学校の変化もありました。そう考えると、総合学習というものの強力な1つの学びの繋げる力となりながらですね、教科そして活動、色んなものが、そこでESDという文脈の中で、もっと先に行ける力を持っているのかなと思います。それについても村川先生にもお話を頂ければなと思います。そして、こういうようなものをするによって、最後にスライドですけれども、色んな枠をESDとはこういうものだということが世の中で言われ始めるようになってきました。しかしながら、重要なことは、持続可能性に向けて我々が囚われずにやるということが非常に重要かなと思います。色んなものを例にしながら、でも北綱島の特徴を出し、そして先生方の特徴を出すことによって、囚われない、恐れない、諦めない、こんなチャレンジができる学校になっていけばいいのかなと思います。ESDというものを、何か上から降ってくる面倒臭いものとして捉えるのではなく、我々が元気になり、子どもが元気になり、地域が元気になる、そんな連動が生まれるESDとして取り扱って頂ければなと思います。

最後のスライドです。近年ではこんなSDGs 17の目標なんて出てきました。こんなものも、防災を、そしてESDを、総合を、色んな各種教科を捉え直すきっかけにもなるのかなと。そんな形で終わらせて頂きます。ぜひこれからディスカッションを楽しんで下さい。ひとつ、2人昆先生と國分先生に聞きたいなあとと思っているのは、後で結構ですけれども、ESDをやることによって、何か変わってきたことがあるのかっていう、そんな実体験、実感っていうのを少しでも言ってもらえればなと思います。後ほど期待しておりますのでよろしくお願い致します。では終わりにします。ありがとうございました。

昆

対談ですので、また村川先生と佐藤先生のお話が行ったり来たりすると思うのですが、一つ本校がまだESDを意識していないとき、「ああ、今になるとこれがESDだったのか。」と思う一つの例を挙げさせていただくとすれば、この安全防災教育を通して本当に子どもたちと教職員と地域の方が本当にあの顔の見える、名前のわかる、とても良い関係になってきたな、という風に思います。そのことで、私たちが子どもたちが変わっていく様を見て、実は驚いています。こんなに本気で安全防災教育できるんだ。そして地域の方々も本当に子どもたちがかわいくてたまらない。「学校の外でも名前を呼んでくれるんだよ。

本当にうれしいよ。」と言って、さらに気持ちを込めて子どもたちの教育活動に接してくださっています。これが「繋がる」って一つのE S Dの形なのかなって、今になるとそうなのかなと思っている次第です。

こういった本校のカリキュラムを4年間継続してご指導くださっています村川先生、今佐藤先生からいろいろご質問もありましたけれども、まずはカリキュラムマネジメント、それから身に付けるべき資質・能力など、新しい学力観についてもお話しいただければと思います。お願いします。

村川先生

はい。昆先生には、ちゃんとかみ合うようにまたいろいろ導いていただければいいかなと思います。

今年から甲南女子大というところに移りました。どんなところかと言いますと、こんな感じです。〈映像〉これがゼミ生です。こんな授業をやっています。お互いの教育実習の記録映像を見て、気づきやコメントを付箋に書いて整理するワークショップです。学部の3年生ですが、こういうことを毎週のようにやっています。

指導要領の改訂には3、4年かかわりました。会議の時によく言っていたのは、「指導要領を変えるたびに学力観をころころ変えたらあかん。」です。そう言いながらも私なりに整理してみました。いろんな学力観があります。国内外のものを整理するとこんな風になりました。まず、どんな問題であってもあるいは目の前の仕事が無くなってもあきらめない。何とか、まず自分で何とかしようと考えてみる。いろんな経験とか知識があるわけですから、まずはあきらめずにやってみる。でも一人で背負いこまない。世の中にはいろんな人がいるから、そういう人たちと協力して問題解決したらいい。国内外の学力観を整理したらこうなりました。これはまさにE S Dの考え方と一緒にです。こういう生き方が求められていると思いました。

今度の改訂で、資質・能力が整理されました。ご存知のようにこの3つです。この3つは関係し合っています。未知の状況に対応できなきゃあかん。でも、それには知識や技能が必要です。知識や技能をしっかり身に付けていきながら、それらを使って問題解決できる子ども。学びながら自分の人生だとか社会と繋げて、さらに学び続ける子ども。そういう学力観いわゆる資質・能力観が今回出された。そういう意味でも今の佐藤先生の話にも通ずるものがあると思います。

アクティブ・ラーニングが2年ほど前に登場しました。当時はこういう表現でした。「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」これが出たときに気付いたのが、なんだこれと一緒にやないか。国内外の学力観を整理すると、先ほど言いました3つなんですけど、このアクティブ・ラーニングの元々の定義のようなものが全く一緒だということです。これは先ほど言いましたように、アクティブ・ラーニングというのは生き方なんだということです。幼稚園から高等学校まで、主体的で対話的で深い学びを通して、そういう生き

方のできる子どもを育てようということです。これは正に先ほど佐藤先生が言われたことと繋がっていくと思います。

詳しい説明は、今回は十分にできませんが、これはアクティブ・ラーニングの3つの視点です。主体的な学びというのは、どういうことがポイントかということ、学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方、今学んでいるこの教科、今日の教材が自分の人生や社会とどう繋がっているのか、こういうことを教科の学びの中でもしっかりやってもらいたい。今までこういうことは総合の学習ではやってきたんですが、これが教科等の中でも問われている。対話的な学びってというのは、一つには直接的な対話もありますが、例えば書物を書かれた人とどう対話するか、いわゆる自己内対話のような対話もあります。先人の考えを自分の考え方と比べながら読んでいくのも大事なかなと思います。もっとも難しいのは、深い学びです。深い学びでのポイントは、各教科等で習得した知識や考え方を活用した見方・考え方にあります。習ったことは使う、知っていることは使うということ。できることはやる。こういうことを子どもたちに徹底させるということです。その上で、しっかり考えたり発見したり自分の考えを形成したり構想したり創造したりする。大事なことは知っていることは使う、できることはやる。こういうことを子どもたちに意識してさせることが深い学びに繋がるかと思っています。

深い学びになるためには、やはり対話が必要なんです、その前に自分でしっかり考えることが前提になる。自分でしっかり考えて友達と話すことによって、わからなかったこともわかるようになる。できなかったこともできるようになる。そういう手応えや実感を通して子どもたちは学んでいくと思います。その前提として、この受容的な関係づくりが大事ですが、実は総則の冒頭でも、児童の言語活動など学習の基盤となる学習活動、こういうのをしっかりやってということが言われています。

北綱島小はどうでしょう。これは3年生の教室です。こんなクラスにしたいなということをもまず子どもたち一人ひとりが考え、クラスで整理し共有化を年度のはじめにしています。これはまさに関係作りを子どもたち主体で行っている。それから同じく3年生。言葉が大事です。豊かな言葉を子どもたちが知っているから話し合える。知らないと使えません。私はよく言うのですが、このようなものを貼っといたらいいと。使って身に付ける。非常に丁寧に行われていたと思います。

深い学び。今言いましたように、知っていることは使う、できることはやるということ。を今度は総合に関連させていくことが大事になります。具体的に見ていきたいと思っています。深い学びにつながるためにはこの4つが大事と考えています。一つは、豊かな体験、リアルな体験を自分なりの自分の言葉でまとめること。これが学びの核になる。特に総合的な学習と生活科はそうですね。その上で、自分の体験だけじゃなくて地域の色々な人、そういう人たちから情報を得る。これは2つ目になります。次に、地域のことだけを知っていても、地域の方には発信できません。本やインターネットなどで、体験的な情報を核としながら、色々な周辺の情報、こういうものを身に付けていくことが大事です。そして

う1つ大事なものは、教科等で身に付けた知識や技能です。この4つが合わさったときに、深い学びになると考えています。

では、今日の授業でこの4つの関係を見ていきたいと思います。

まず、基本的な関係づくりをベースとした主体的な学び。これは、私が見た2年・3年・5年のどの教室でも、子どもたちの意欲的な様子が見られました。特に今難しいと言われている深い学びですが、このあたりを見ていきたいと思います。これは2年生です。探検に行く前に子どもたちが「何を聞いてくるのか。」を確認している。これを教師が与えるのではなく子どもに考えさせています。こういう目的意識をしっかりと探検に行くからこれだけのことが聞いてこられる。先ほど言いましたように、こういった確かな情報をしっかりとっておくことが、この後の学習展開に効いてきます。2年生ですが、私も色々な学校を見に行っていますが、この子たちもそうとう文章が書けています。しかも論理的です。色々な学校で、分量だけは多いですが、書きなぐっているのはよく見ます。何人かしか見られていませんが、きちっとした文章が書かれている。先ほど言ったような情報をしっかりとった上で、具体的な体験もした上で、子どもたちが学び合っていると思います。先ほど言いました体験とそれを支える情報、こういったものが2年生でも見られました。

次、3年生です。実は北綱島小では平成27年の3月に初めて年間指導計画の見直しをやりました。その時、私が一番しんどそうだなと思ったのが川の学習です。一番難しいテーマが3年生だったと思います。なぜ難しいかということ、実は川というのは二面性がある。川は豊かだけど怖い。先週九州の筑後市というところに行ってきました。筑後川というのも暴れ川です。江戸時代にその川をコントロールするためにすごく苦労したという話があります。豊かな川ほど怖いんです。それを3年生の発達段階で、教科で学ぶ知識や技能できちっと押さえていくのは非常に難しいです。そういう意味では苦労されたと思いますが、子どもたちはしっかり体験して、色々な調査に基づいて、しっかり文章にまとめられましたので、難しいながら3年生一生懸命頑張っているなと思いました。たぶん先ほどのような話し合うためのベース、言葉とか、先生方の工夫ですね、こういったのが効いているかなと思います。

5年生も体験を非常に重視し、その上で調査もしっかりやっている。体験だけでは留まらず、エビデンスを絡めているので子どもたちの学びが深いのかなと思います。簡単ですがアクティブ・ラーニングとの関連でお話しさせていただきました。

カリキュラムマネジメントはこの3つの側面を押さえて頂いたら基本的にはいいのです。

1つ目は、教科横断的な視点による教育内容の関連付け、配列です。本校もそうですが、総合的な学習では教科横断型でやっています。きちっと単元計画にも書かれています。実際、子どもたちの今日の学びが深いのは、教科等で学んで身に付けた知識や技能を使っているからです。今日の授業から具体的に見てとれます。

2つ目は、子どもたちの姿や学力の結果などをしっかりと踏まえて毎年度カリキュラムを見直すということです。先ほどもちょっと紹介しましたが、本校では十分になされています。

す。

3つ目は校外の物的・人的資源の活用です。3年間ずっと毎年この時期に授業を見ていますが、地域の人とのかかわりがますます良くなっている。学校と教師と子どもと地域が育っていると感じます。やっぱり続けるというのは非常に大事だなと実感します。

最後に繋ぐということです。先ほどの佐藤先生の話と繋いでみます。総合学習はまさに学びを繋ぐ。縦に資質・能力を繋いでいくということ言えば、縦に子どもの成長を繋いでいくということ。それから、子どもの姿を見て、単元づくりあるいは年間指導計画を見直す。そういうことをすることによって、子どもの学びが、子ども一人ひとりの学びが繋がっていくということになると思います。

最後に、総合学習っていうのは、地域社会だけじゃなくて、子どもたちの未来に繋ぐということ、まさにこの学校でやっている取組が繋ぐという意味で、新たな展開をまた見出しつつあるかなという感じはします。

昆

先ほど佐藤先生からも **ESD** というところで、地域とのかかわりや、教員のかかわり、子どもたちの関わり、など、どう変わりましたか、と國分先生にあとでいいですよとおっしゃったんですけども、今、村川先生のお話の中にも3年生の川の単元、非常に難しいっていう、カリキュラムマネジメントするなかでも難しいところだというお話もありましたので、3年の松本の実践に、研究主任であり、学年主任である國分が大きくかかわっておりますので、その辺の苦労話をしてもらおうかなと思います。

國分

先ほどの佐藤先生からの **ESD** で何が変わったかということなんですけども、お話ししたいと思います。ESD といってもまだ十分に理解していなくて、様々な研究会に行ってもこの場でこういうことなのかと思っても、次の日になると何のことやらと忘れてしまうことが多かったんですけども、何回か研修を重ねていくなかで、私のなかで掛け算という考えが一番ストーンと落ちました。

6年間を通して防災教育を行っていく、6年間の系統性を考えていったときに、6年間ずっと防災をやり続ける苦労があります。6年生くらいになると、「また防災かよ。」となることもありますので、防災を前面に出さないでどうやって6年間防災を学習するっていうことをどうやって仕掛けるか、とても苦労しました。でも、掛け算という考えで見直してみたら、これまでやってきたことが全部防災と繋がるんだということがわかったので、私に変化したことは、単元を開発するときに私の苦労はなくなったというか、教員の苦労が少し減ったということです。今までのことを見直すだけで防災と繋がっているんだとわかったことが大きな収穫だと思います。

3年生の川の単元ですけども、7年前に安全防災学習を始めたときは4年生でした。4

年生は社会科でも、先人の知恵を学ぶという吉田勘兵衛を横浜ではやっているんですけども、そこと絡めて先人の知恵を学ぶということで川を教材にして総合と社会を絡めて学習すれば深い学びになるだろうということで、最初は4年生の教材だったんです。けれども、消防団の方が身近で、親しみやすいだろうということで消防団で行ってきました。7年間の中で、私の中では、川をどこかでやってみたいという思いがあったのと、地震というちょっと怖いというイメージがあると思うんです。もちろん川も怖いところもあるんですが。地震だけではなくて、自然は豊かだけれど怖いところもあるんだということを川を通して3年生なりに感じてもらえればいいかなというところで3年生は川を設定しました。

併せて、これは、去年の荏本先生のお話なんですけど、鶴見川の流域は軟弱地盤で川が流れている地域に住む以上は6年間のどこかでは、ここに住む以上は川を取り入れた学習をしたいと考えてやりました。でも、やっぱり大変でした。

昆

ほんとにどの単元も教職員が地域の方やいろいろとご指導してくださる先生方にご助言いただきながら一つずつ大事に積み重ねてきたわけなんです。今日個別支援学級はさまざまな災害を想定した防災の授業をしたんですけども、佐藤先生も熱心に参観していただきましたので、そういったことも、本校の実践も含めて、佐藤先生のESDの観点から今日の本校の実践をご覧になって何か感じるものがありましたら、ぜひお話いただければと思います。いかがでしょうか。

佐藤先生

はい、ありがとうございます。個別級の部会の方も出席させていただきながら、話を聞かせていただきましたけれども、地域とかかわることによって、地域の人たちも変わってきている、それぐらいの規模でこの学校は動いているんだなど、非常にそこは感銘を受けました。個々の目の前の子どもたちのことを見ながら、それによって社会そのものも変容していることを言うと、この一つの防災教育という切り口ですけれども、結果的に地域を学ぶことによって社会を変えていくことになる。もしかしたら先ほど國分先生がおっしゃたように防災教育という言葉があることによってできることもあれば、それに振り回されてしまうこともたぶんあると思うんです。だから、今後先ほどの掛け算の話もそうですし、言葉そのものを変えていくことをやることによって、今までのものがもっと生きてくるんじゃないか。総合学習もそうですし、これからの学校全体のことを考えたとしても、今まで積み重ねてきたことをどういうふうに生かしていくか、というときに、もう少し工夫があると、突き抜けるのかな。という、そういう印象を受けました。

昆

今、佐藤先生から、もうちょっと工夫があれば突き抜けていけるんじゃないかというご

意見でしたけれども、村川先生、いかがでしょうか。本校は何を突き抜けていけばいいのでしょうか。

村川先生

あの～いきなり最後のはなし。その前にちょっと國分先生にも質問しようかな。

今回、育成を目指す資質・能力の3つが登場しました。授業あるいは単元の振り返りで。何ができた、何がわかったが1つ目。学び方の振り返り、どういう学びをしたからできたのか分かったのか、というのが2つ目。これからどうするのが3つ目。今日授業を見ていましたら、3年生ですが、振り返りをまさにこの3つの柱でやっていました。いつごろからこのような振り返りをしているのか、こういう振り返りをするので子どもの変容はどうなのか、このあたりをお聞きしたいなと思います。

國分

いつごろかといいますと、歴史が浅くて、去年です。3年前から社会の重点研究をやっているんですけども、その中で、振り返りをどうするかということで、この3点を示してやったほうがいいということで行いました。この3点にした理由は、今日わかったことを確認すると同時に、次の見通しをもつということが大事だということこの3点にしました。子どもが変わったことは次の学習をするときに、「先生今日何だっけ？」ということはない。「今日はこれをやるんだね。」ということから始められるというところが変わったところですよ。

村川先生

はい。それは文部科学省より先にやっているということですね。この3つの視点は知っていたんですか？これをふまえてやっていたわけではない？あ、それはすごいね。横浜って文部科学省を超えているわけね。

では、最後にまとめていいですか。お話しさせてもらいますね。

最後ということで、今後の課題みたいなことを話したいと思います。

色々なところで北綱島小の実践を紹介してきました。特に、安全防災教育に関しては汎用性が高い。何度も言うように、どこの地域でもできる。例えば、今日配られた資料でもカリキュラムマネジメントの考え方が具体的に示されているので、防災のカリマネとしても、カリマネを理解する上でも汎用性が高いなと思っています。学援隊、子ども110番、消防団、家族のマニュアルづくり、防災リーダーなど、これは日本全国どこでもできるテーマかなと思います。確かに、地域によっては、川とか海とか山とか、色々な防災上の課題が起きそうな地域性ってありますから、どこかの学年で、川とか具体的な対象は入れるべきだと思います。でも、3年は厳しいかなと思っています。

今後の課題ですが、何といっても国際都市横浜です。横浜ならではの安全防災教育とい

うのが今後期待されると思います。

20年以上前ですが、こんなことを教えられたことがあります。子どもたちが消防署の調査に行ったのです。私の子どものころの消防署は、暇なときにキャッチボールしているというイメージがあったんです。体を鍛えているというだけかなと思っていたんです。それで、子どもたちが消防署に行ってインタビューした時に、「時間あるときはどんなことやっているんですか」と聞いたら、「語学の勉強をしていますよ。中国語、韓国語、スペイン語などを勉強しています」。「なぜですか?」と聞いたら、「地域に外国の方がいるから、何かあった時には誘導せなあかん」という話をしてくれたそうです。子どもたちは消防署の人はそういうことを考えているんだなと。これ20数年前の総合学習です。これは、私が子どもから教えられたことです。

これから小学校に外国語・外国語活動がさらに入ってきます。横浜市はなんたって国際都市です。それがらみの安全防災教育があるかなと思っています。たとえば、火事や地震があった時に外国の方も被災する可能性がある。外国の方が日本に長く住んでいる場合でも、パニック状態になったとき、日本語を忘れますよ。そんな時に、子どもたちがちょっとでも誘導してあげられれば。大人は英語ができませんから、子どもたちがちょっとでも誘導するような英語を教えてあげられれば。たくさん言葉はいらない。15か20くらいあればいいことでしょう。それから被災すると、学校は避難所になります。外国の方も寝泊りします。日本とは生活習慣が違いますからそういうこともしっかり理解しながら、外国とつながる国際都市横浜ならではの安全防災都市になればいいかなと思います。

前にも紹介したものです。ずいぶん前の記事ですが、10歳の子どもが100人を救ったという話です。

学校で勉強した地震が起きたら津波が来ることを覚えていて、10歳の子どもがホテルに言ってビーチにいる観光客を避難させた。日本は世界で一番災害が多い国だと思います。安全防災教育を学んでいる学校が増えました。例えば、安全防災教育を学習していた子どもたちが仕事や観光で外国へ行って、そこで、何か災害が起きたとしましょう。その時に人々を救うようなことができる、そういう学びをしている国民だと思います。その時に、身につけた知識、技能が活用できるためには、英語の力が必要になります。日本人はもともと地震や災害があってもパニックにならない、暴動が起きない国民である、と言われています。そういう意味でも世界でどっか何か起きた時、国内でもそうですけども、率先して国際的に活躍できる人材を育てていくということがESDにつながるのかと思います。佐藤先生、いかがでしょうか。

佐藤先生

まさにそういうことなのかなと思います。防災ということの話をするとき、災いを防ぐという言葉があった。実はもう持続不可能性に対する気づきをやっているということなのだと思うのです。防災というのは目の前にあるその自然災害だけではなく、地域のコミ

ユニティの問題、信頼関係、自助の問題、いろんな関係を掘り下げていく、この学校を考えてみると、本質的なものに向き合っている。そういう意味で防災という切り口を大切にしながら、その意味合いを限られた意味合いと捉えるのではなく、もう一回見直すことによってその意味合いが深まるのかな。持続不可能性ということへの気づきをしっかりと気づくことによって、単なる目の前の対処療法からより人と人との関係性、人と自然との関係性、そして、世界と地域がつながるような取り組みとしてなっていくのかなと思います。そういう意味で考えるとポテンシャルが大きい北綱島をととても楽しみにしています。これからも、仲間に入れていただけたらな、と思います。村川先生、いかがでしょうか。

村川先生

安全防災教育はいろいろな意味で、どんなテーマで取り組んでもいいんです。さっき言ったように、しっかり体験し、そして人と関わる、そしてそれを支える情報をしっかり使って様々な問題解決していけるというのが、子ども自身が自覚する。そのような経験を積み重ねて自覚するというのが、大きな問題にであったときに、あきらめずに解決できる、人と関わりながら問題解決していけるということにつながるのかなということを、今日の授業を通して改めて学ばせてもらいました。ありがとうございました。

昆

村川先生、佐藤先生、本当にありがとうございました。私たちも安全防災教育×ESDというところで、気持ちがとても楽になったというか、この方向でやっていっていいんだな、と。地域の方ともっともっと関係を深めていって、地域の防災リーダー、もしかしたら大人になって世界のどこにいても、その時に、しっかりと判断して行動できる人を育てているという自信がわいてきました。本当に今日はお二人の先生の対談で勇気づけられました。ありがとうございました。